



医療教育開発センター ニューズレター

徳島大学大学院
ヘルスバイオサイエンス研究部
医療教育開発センター

1 巻頭言

2 副センター長の紹介

3 取組紹介

4 これからの主な取組

1 巻頭言



～アクティブ・ラーニング～

医療教育開発センター長 赤池 雅史

アクティブ・ラーニングとは、「教員による一方的な知識伝達とは異なり、課題演習、質疑応答、振り返り、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等を取り入れることにより、学生自らが考え抜くことを教員が促し、学生の能動的な学修を促進させる双方向の教授・学修のこと」と本学では定義されています。医療人には、複雑・複合かつ不安定な問題点を自ら解決していくことができる能力が必要であり、その専門家像として、現実の経験や行為の中で省察を繰り返しながら成長していく反省的実践家（reflective practitioner）が提唱されています。学修者がこのような専門家へ変貌・成長するには、その行動変容が必要となるため、受動的教育手法で反省的実践家が育成されるとは考えられず、アクティブ・ラーニングが有効かつ不可欠な教育手法といえます。

近年、医療教育には、PBL チュートリアル教育、研究室配属、診療現場実習・インターンシップ等が積極的に導入され、専門科目ではアクティブ・ラーニングの機会が飛躍的に増加しました。しかし、実際には学生も教員もアクティブ・ラーニングの理解が不十分で、レクチャー等の受動的座学が中心になる等、いわゆる「消化不良」で進行しているという指摘もあります。一方、蔵本地区全体で毎年実施している学生対象の授業評価アンケートでは、「教員による重要事項の強調」や「わかりやすい授業の実施」が、学生の能動的学修時間を逆に短くすることが明らかになっています。このように、真のアクティブ・ラーニングの実現には、学生も教員も大胆な発想転換が必要と考えられます。

このような状況の中で、この度、文部科学省「大学教育再生加速プログラム」のテーマ「アクティブ・ラーニング」に、本学から申請した事業が、高い競争率の中、見事採択されました。この事業のコンセプトは、初年次の大学入門講座に、反転授業、グループワーク、学修ポートフォリオ、専門領域早期体験等によるリフレクションを基盤とした学修を取り入れることで、学生はラーニング・スキル、教員はティーチング・スキルを身につけながら双方が共に成長し、学士課程全体へのアクティブ・ラーニングの浸透を目指すというものです。医療教育開発センターでは、本事業の採択を契機に、この実施中核となる総合教育センター教育改革推進部門、ならびに大学入門講座を実施する医学部、歯学部、薬学部、全学共通教育センターとの連携を深め、本学におけるアクティブ・ラーニングの実質化を通して、基礎的・汎用的能力を基盤とした専門的能力を有する医療人の育成に貢献していきたいと考えています。

このように状況の中で、この度、文部科学省「大学教育再生加速プログラム」のテーマ「アクティブ・ラーニング」に、本学から申請した事業が、高い競争率の中、見事採択されました。この事業のコンセプトは、初年次の大学入門講座に、反転授業、グループワーク、学修ポートフォリオ、専門領域早期体験等によるリフレクションを基盤とした学修を取り入れることで、学生はラーニング・スキル、教員はティーチング・スキルを身につけながら双方が共に成長し、学士課程全体へのアクティブ・ラーニングの浸透を目指すというものです。医療教育開発センターでは、本事業の採択を契機に、この実施中核となる総合教育センター教育改革推進部門、ならびに大学入門講座を実施する医学部、歯学部、薬学部、全学共通教育センターとの連携を深め、本学におけるアクティブ・ラーニングの実質化を通して、基礎的・汎用的能力を基盤とした専門的能力を有する医療人の育成に貢献していきたいと考えています。

2 副センター長の紹介 ●●●

岩田 貴(医療教育開発センター専任准教授)

スキルズ・ラボの活動としましては、このたび高機能シミュレータが続々と配備されました。これらを利用した専門医を目指す医療人をはじめ学生を対象に講習会、実習を鋭意進めております。

個人の活動では、これまでに年間5つの全国学会と2つの学内学会に発表することを自分に課してきて、そのまゝとめとして、このたび平成26年度科学研究助成金基盤研究Cを獲得し、ある一定の業績を上げることができたと感じております。これに甘んじることなく、学内の卒前卒後教育だけでなく、地域と連携して学外で活躍する医療人を対象とした卒後教育、生涯教育、復職支援にも力を注ぐ予定です。さらに科研のテーマでもあります「スキルズ・ラボのグローバル化」を目指した英語による実習や、学生・教員共同FD学部連携チュートリアル授業の発展など、さらにスキルズ・ラボを拠点とした新しい試みを進めてまいります。



野間隆文(口腔科学教育部教授)

平成26年度も引き続き、歯学部および口腔科学教育部の代表として副センター長を務めることになりました。現在、国立大学は政府の「日本再興戦略」、「教育振興基本計画」、「これからの大学教育等の在り方について(第三次提言)」等を踏まえて、自主的な改善や発展をする改革が求められています。医療教育開発センターではその社会的ニーズをしっかりと受け止め、教育プログラムの中に取り込んでいくことが重要と思います。徳島大学の教育・研究活動では、グローバル化時代の国民的ニーズに応えていくための先進的な課題への挑戦にも取り組んでいけるものと思います。そのためにも進取の気風を育む教育体制の構築・運営に尽力したいと思います。



斎藤博幸(薬科学教育部教授)

今年度から、薬科学教育部を代表して医療教育開発センターに参加させて頂くことになりました。薬学部では、1年生の薬学体験実習やチーム医療入門、4年生の実務実習事前学習・OSCE、5年生の病院実習でのIPEなど、医療教育開発センターを通じた多くのプログラムに取り組んでおります。また、薬科学教育部では、臨床に根ざした高度な専門知識と研究能力を有する薬剤師の養成を掲げている薬学専攻はもちろんのこと、創薬・育薬研究者の養成に重点を置く創薬科学専攻におきましても、医療教育開発センターを通じた幅広い知識や汎用的技能の修得は非常に重要であると考えております。多様な分野間で連携・対応しうる能力を身につけ、未踏分野の開拓精神に溢れたYAKUGAKUJIN(薬学人)の育成に努力していきたいと思っておりますので、ご指導の程よろしくお願ひ申し上げます。



酒井 徹(栄養生命科学教育部教授)

平成26年から栄養生命科学教育部委員長となったため医療教育開発センターの副センター長を務めることになりました。

栄養学科は、改組により本年度から医科栄養学科と名称が変更になり新たなスタートを切っております。学部改組に伴い、大学院教育でも従来の基礎的な研究に加え臨床的な栄養学研究に強い大学院生を育てることが今後の大きな課題となっています。ベッドサイドにおける教育は、言うまでもなく一部の職域者のみを中心としたものでなく、すべての職域全体での連携が重要とされています。幸い、HBS研究部は、特徴のある5つの教育部が大学院教育を担っており、縦断的な教育指導体制が可能です。これまで医療教育開発センターは、幾多の革新的な取り組みに挑戦し、そして成果を上げてきました。今後、医療教育開発センターおよび各教育部との連携体制を構築し、臨床栄養研究者の育成に携わることにより尽力していきたいと思っております。



谷岡哲也(保健科学教育部教授)

昨年度に引き続き、副センター長として、医療教育開発センターの活動に参加させて頂きます。医学部ではグローバル化が迅速かつ大胆に進められています。保健科学教育部においても、今年からアメリカ人の常勤教授のRozzano C Locsin先生が看護学専攻に加わり、国際プログラムを開設します。重点的な英語学習や海外留学により、海外での免許取得に挑戦し、グローバルな視野で将来リーダーシップのとれる医療職および教育・研究者を育成していきたいと思っております。



3 取組紹介 ●●●

■多職種連携教育(IPE)～「学部連携PBLチュートリアル」の試み

様々な医療の現場で、多様な専門職が互いの能力を引き出すよう協調・連携してチーム医療にあたる多職種連携実践(IPW:inter-professional work)が注目され、それに伴い多職種連携教育(IPE:inter-professional education)の充実が求められています。

徳島大学蔵本キャンパスでは初年次基盤作りとして1年次に「チーム医療ワークショップ」を開催しています。

次のステップの模索として、患者シナリオを用いて複数の学科の学生でグループ討議を行う「学部連携PBLチュートリアル」を実施しました。

【日 時】1回目 平成26年3月25日(火) 17:00-18:30

2回目 平成26年3月26日(水) 17:00-18:30

【場 所】医学部第三、第四会議室(医学臨床A棟1階)

【参加者】有志参加

医学部 - 医学科4年生1名、3年生1名、栄養学科2年生2名、保健学科看護学専攻2年生2名

歯学部 - 歯学科4年生2名、3年生2名

【進 行】1日目:①シナリオの検討

②プロブレムマップと問題点リストの作成

③問題点リストの優先順位決定

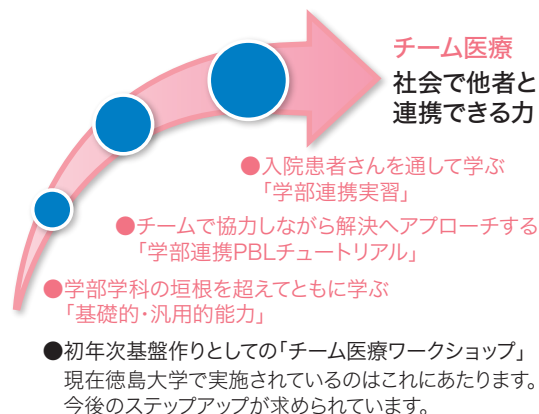
④それぞれが担当する学習項目の検討

2日目:①それぞれが持ち帰った自己学習内容の共有

②プロブレムマップと問題点リストの修正

③シナリオの再検討

【今後の課題】準備段階より多くの学科の教員のご協力のもと、複合的・多面的な問題点を含んだ症例シナリオを作成し、第2回の開催を目指しています。



■基礎教育におけるシミュレーターの活用

シミュレーターは高学年の臨床実習前教育やクリニカルクラークシップにおける、ならびに医師や看護師などの技術トレーニングに活用される機会が主でしたが、今年度からは医学部の生理学や薬理学などの基礎教育においてもシミュレーターが活用されています。



医学部医学科2年生:生理学実習
心臓病診察シミュレーター“イチロー”、呼吸音聴診シミュレーター“ラング”、採血静脈シミュレーター“シンジョー”



医学科3年生:薬理学実習
救急ケアシミュレーター“ECS”



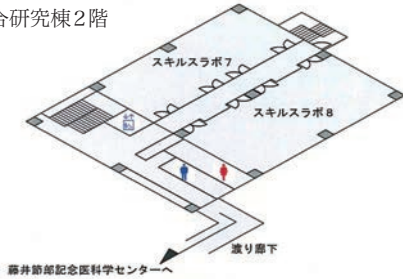
保健学科放射線技術科学専攻2年生:基礎医学実習
血管インターベンショントレーナーMentice VIST

■お知らせ～竣工した総合研究棟2階にスキルス・ラボが広がりました。

総合研究棟2階がスキルス・ラボ7(88㎡)、スキルス・ラボ8(104㎡)になりました。これまでの施設と合わせ、総床面積572㎡の施設となります。

スキルス・ラボは安心・安全な医療を目指して、基本的～高度な医療技術・技能を習得するためのシミュレーショントレーニング施設です。学部学生、大学院生をはじめ、医療に携わる学内・学外すべての方の総合的な医療人教育に活用されます。ご利用に関しましては、医療教育開発センターにご相談ください。

総合研究棟2階



■組織横断型クラスターにおける大学院教育支援

平成21年度より教育クラスターによる大学院教育支援が継続されています。「心・血管」「肥満・糖尿病」「感染・免疫」「骨とCa」「ストレスと栄養」「脳科学」の6つのクラスターが活動しています。

クラスターコアセミナーは各クラスターが主催する最先端内容の講義として、開催されます。今年度も合計30回以上の開催が予定されています。詳細は開発センターHP (http://www.hbs-edu.jp/center/center_brief.html)にて確認できます。



4 これからの主な取組

●2014 Tokushima Bioscience Retreat

日時：平成26年9月18日(木)～20日(土)
場所：香川県 リゾートホテルオリビアン小豆島

●医療教育開発センター特別講演

日時：平成26年9月29日(月) 19:00～20:30
場所：スキルス・ラボ7(総合研究棟2階)
講師：服部 万里子先生(公益社団法人 長寿社会文化協会 理事)
演題：在宅医療と高度急性期病院との連携

●第8回「チーム医療入門」蔵本地区区1年生WS

日時：平成26年9月30日(火) 13:00～17:00
場所：蔵本キャンパス(大塚講堂他)
講師：服部 万里子先生(公益社団法人 長寿社会文化協会 理事)
演題：高齢者医療の現状と向き合おう

●第7回医療教育講演会

日時：未定
講師：市橋 亮一先生(総合在宅医療クリニック 代表)

<企画中>

●第4回How to医療コミュニケーション教育

●第2回学部連携PBL チュートリアルトライアル

●ヘルシンキ・メトロポリア応用科学大学生スキルス・ラボ研修

●学会活動●

●第114回日本外科学会定期学術集会 2014年4月3～5日(京都市)
『大学と関連病院が連携した若手医師の研修プログラムの構築—地方からの提言—』
岩田 貴¹⁾、島田光生¹⁾、栗田信浩¹⁾、佐藤宏彦¹⁾、吉川幸造¹⁾、西 正暁¹⁾、近清素也¹⁾、高須千絵¹⁾、柏原秀也¹⁾、松本規子¹⁾、赤池雅史²⁾
徳島大学病院外科¹⁾、徳島大学大学院HBS研究部医療教育開発センター²⁾

●第39回日本外科系連合学会学術集会 2014年6月19～20日(東京都)

『卒前・卒後の内視鏡外科手術教育におけるトレーニングの検討』
岩田 貴¹⁾、島田光生¹⁾、栗田信浩¹⁾、佐藤宏彦¹⁾、吉川幸造¹⁾、東島 潤¹⁾、西 正暁¹⁾、近清素也¹⁾、徳永拓哉¹⁾、中尾寿宏¹⁾、赤池雅史²⁾
徳島大学病院外科¹⁾、徳島大学大学院HBS研究部医療教育開発センター²⁾

●第69回日本消化器外科学会総会 2014年7月16～18日(東京都)

『内視鏡外科手術のさらなる発展に向けたoff-the-jobとon-the-jobトレーニングの検討』
岩田 貴¹⁾、島田光生¹⁾、栗田信浩¹⁾、佐藤宏彦¹⁾、吉川幸造¹⁾、東島 潤¹⁾、西 正暁¹⁾、近清素也¹⁾、徳永拓哉¹⁾、柏原秀也¹⁾、赤池雅史²⁾
徳島大学大学院HBS研究部消化器・移植外科学¹⁾、医療教育開発センター²⁾

●第46回日本医学教育学会大会 2014年7月18～19日(和歌山市)

『海外交流留学生と日本人学生合同のスキルス・ラボのグローバルスキルトレーニング』
岩田 貴¹⁾、赤池雅史¹⁾、岡久玲子³⁾、橋本浩子³⁾、長宗雅美¹⁾、福富美紀¹⁾、島田光生²⁾
徳島大学大学院HBS研究部医療教育開発センター¹⁾、消化器・移植外科²⁾、大学院HBS研究部³⁾
『医学生に必要な医療コミュニケーション能力—臨床実習前教育とクリニカルラークシップとのギャップ—』
長宗雅美、岩田 貴、福富美紀、赤池雅史
徳島大学大学院HBS研究部医療教育開発センター

●第249回徳島医学会学術集会 2014年7月27日(徳島市)

『医療教育開発センターにおける中心静脈カテーテル(CV)留置術個別講習会の取組みについて』
岩田 貴、赤池雅史、長宗雅美
徳島大学大学院HBS研究部医療教育開発センター

●医療教育miniコラム●

反転授業

従来型の授業では、授業中に教員が学生に知識を伝授し、学生は授業外で学習内容の復習を行っていた。これに対して、反転授業では、学生はe-learning等によって自宅に先に予習を行い、教室ではいわゆる「講義」は行わず、事前学習で学んだ知識の確認や個別指導、グループでのディスカッションや問題解決による協働型学習を行う。能動的学習者の育成を目的としたアクティブ・ラーニングの手法のひとつとして、今後、医療教育にも導入が必要と考えられる。